

ある日の出来事

作 伊東由美子

客電が落ちると、暗い中「世界の車窓から」のテーマ曲が聞こえてくる
それと共に、男の息遣い

明かりが薄ぼんやり点いてくると、血の付いた包丁を持った男が立って居る
先ほどの息遣いは、彼の口から発せられている

その奥では、男が一人血を流して死んでいる

男の息遣いが漸く収まって来た時、上手で人の気配

女が一人、息をのんで立っていた

気配を感じてゆっくり女の方を向く男

見つめ合う二人

暗転

明かりが点くと、先程の男が一人座っている

どうやらここは工場の事務所の様であるが、具体的な要素は何もない

男の他に女が二人いる

一人は事務的な事をやっており、もう一人はそれを待っている風である

女1 どうしたの？大丈夫？

男1 え？

女1 何だかぼうつとしてる様だけど。

男1 あ…、

女1 嫌な知らせでも書いてあったの？

男1 え？

女1 それ。だって手紙でしょ？

男1 え？ああ…

女1 ま、どうでもいいけど。

男1 …母から…

女1 あら、お母様からなの。へえ。(女2に) はい、じゃ、これ今日の分。お疲れさまでした。

女2 (封筒の中身を見て) あの、さっきの話は…？

女1 だから、それは私じゃどうにもならないんですもの、主任に直接言ってください。

女2 昨日言いましたよ。そうしたら明日につて。

女1 だって私は聞いてないもの。それに今日は主任、まだ来てないし…。

男1 え…？

女2 今日中に必要なんです。

女1 そんな事、私に言われても。

女2 お願いです。

女1 主任が来るまで待つしかないわね。

女2 …

男1 …あの、主任は？

女1 さあ、もうそろそろ来るんじゃないかしら。良く知らないわ。

男1 …。

女1 早く結婚しろって？

男1 え？

女1 お母さん。

男1 あ、いえ。…今度、妹が結婚するって…。

女1 あら素敵じゃない。妹さん、おいくつ？

男1 え？…妹？…いくつだったかな？

女1 まあ、ひどい兄さん。

男1 …金持ちのじじいですよ。

女1 え？

男1 相手。金目当ての結婚ですよ。

女2 いいじゃない、お金あるだけ。

女1 …。

女2 ねえ、市川君。

男1 金なら無理っす。

男が二人、「寒い、寒い」と云いながら入ってくる

男2 第3セクション、休憩に入ります。

女1 はい、ご苦労様。

男3 はあ、寒かった。

女1 お茶入れる？

男3 そいつは有難い。

女1 植田さん、悪いけどお願いできるかしら？

女2 え？
男1 あ、俺やりましょうか？
女2 いいわ、わたしがやるわ。

女2、お茶の支度に出ていく

男2 いつまで続くんでしょうかね、この作業？
男3 そりゃ君、終わるまでさ。
男2 そりゃそうでしょうが…。
男3 仕事じゃないぞ。俺たちの命が尽きるまでって意味だ。
男2 え？冗談でしょう？
男3 ところが、そうでもない。
男2 …。
男3 その顔は君、辞める事を考えているな？
女1 辞めてもいいのよ。あんたの代わりはいくらでもいるんだからね。
男2 いや、それは…。
男3 だろう。ここで辞めたらおまんまの食い上げだからな。
男2 …。
女1 仕事があるだけでも有難いと思わなくちゃ。
男2 でも最近、やけに咳き込む事が多いんです。
男3 ふむ、さては肺をやられてきたな。
男2 え？
男3 言っとくが、ここいらの医者に行っても無駄だぞ。指で胸んとこ二、三度叩かれて「これはただの風邪ですな」それでおしまい。
女1 うふふ。
男2 そんな、
男3 肺の一つや二つでビクビクするな。俺なんか毎日血尿が出てるんだぜ。
男2 ええっ？！
男3 ま、そのうち慣れるさ。
男2 慣れるって…、
男3 残念な事に、人間はそう簡単には死ねないんだよ。
男2 …。

女2が皆のお茶を持ってきて配る

男2 ちえっ、僕の人生、こんなはずじゃなかったんだけどな…。
男3 ははは、そいつはいい。
女1 人生が自分の思い通りにいけば、誰も苦勞しないわよね。
男3 確かにこの環境は劣悪だ、劣悪極まりない。しかし君、考えてもごらんよ。こんな環境に我々が居るのは誰のせいだ？社会か？こんな状況を生み出した国のせいかな？無論一つにはそうとも言える。だがね、一番の原因は自分だよ。自分自身のせいなのだ。
女1 またおっ始まったわ、嶋村先生の大演説が。

男1 : 嶋村さん、どうしちゃったんすか？
男3 ?
男1 つつうか、みんなも。
一同 ??
男1 喋り方…。何か変じゃないっすか？
女1 喋り方？
男1 なんか、翻訳劇みたいな…、
男3 言ってる意味が分からないのだが。俺の喋り方は変かい？
女1 ??
男1 いや、いいっす。
男3 え？いい椅子？
男1 え？
男3 え？

男4入ってくる

男4 第2セクション上がります。
女1 あ、お疲れさまでした。
男2 ちえ、もうそんな時間か。嶋村さんのせいで、無意味に休憩時間を過ごしてしまったぞ。
男3 無意味とは失敬だな。
女1 お茶でも入れる？
男4 いや、結構。あれ？主任は？
女1 それがまだなのよ。
男3 第2は今日、明けか？
男4 はい。途中休憩が入るとはいえ、20時間労働ですよ。これ以上は持ちません。
男3 まあお互い、身体だけは壊さない様にしないと。
男2 さつきと云っていることが違うじゃないですか！
男3 そうか？所詮俺なんかこんなもんよ。
男4 そういえば嶋村さん聞きました？あの西通りの婆さん殺されたって。
男1 ！！
男3 あの、金貸しの婆さんだろ？
男4 ええ。
女2 それ本当なの？
男4 ええ、今朝発見されたって。なんでも、斧で脳天をガッツリ。
女1 いやだ、気持ち悪い。
男2 恐ろしい事するなあ。
男3 いや、あの婆さんならそれくらいされても仕方ないな。
男2 そうなんですか？
女1 そうよ。因果応報ってやつね。
男4 ただ、妹の方はちょっと可哀想でしたけどね。
女1 妹って、あの少しオツムの弱い？
男2 巻き添え食らったんですか？

男 4 ああ、ちょうど喰わしてしまつたらしい。

男 1 (急に立ち上がる)

女 1 どうしたの？急に？

男 1 ……いえ…

女 2 え、それで、質草はどうなるのよ？

男 4 警察の方ですべて押収しただろうね。多分これから質草入れた人間を、一人一人当たってくるんじゃないかな。

女 1 え？やだ、みんな疑われてるって事？!

男 3 なんだ、立木女史もあの婆さんに厄介になつて居るのかい？

女 1 ……ほんの少しよ。

男 4 まあ、このあたりの人間は多かれ少なかれ、あの婆さんの世話になつて居るから、全員を調べるのは無理があるでしょうね。ある程度の絞り込みはやってると思ひますが。

男 2 僕、実はオヤジの形見の銀時計入れてるんです。戻ってきますよね？

男 4 君が殺つたんでなければな。

男 2 そんな…、

男 4 はは、冗談だよ。

男 3 それにしても、これで借金はチャラになるだろうから、この一件でどれだけの人間が胸をなでおろしていることか。ねえ、植田さん。

女 2 え…。

男 4 いや、なでおろすどころか、むしろ皆、スカツとしてるんじゃないですか。

女 1 死んでもいい人間っているからねえ。

男 3 ふむ、我々はクズだが、あの婆さんはそのクズ以下だったからな。

男 2 そんなに嫌われてたんですか？あの婆さん。

男 3 評判は良くなかつたな。

女 2 あのババア、貯め込んだ金を、自分が死んだ時には全額教会に寄付するって言つてたらしいわよ。寄付するくらいなら、私たちに還元した方がよっぽど世の為になるのに。

男 3 ふむ、それはどうか。

女 2 死んでも自分の名声の為だけに金を使う意地汚い女なのよ。散々こき使つてた、あの馬鹿な妹にはびた一文も残そうとはせずによ。そんな奴、地獄に落ちればいいんだわ。

男 2 ひどい婆さんもいたもんだなあ。

男 4 そこだよ。確かに人殺しは悪い。だから犯人が捕まれば当然、法的に罰せられるでしょう。でも、あの婆さん殺しの罪の深さはどんなもんなんでしょうかね？

女 2 罪に感じる事なんてないわよ。私に言わせれば、むしろお手柄だわ。

男 4 無論、良心だとか、人間の尊厳なんてもんがある事くらい分かつてますよ。でも、愚かで何の価値もない、いや、むしろ、生きて居ること自体が有害なあの老婆を殺したくなるのも、ある意味で良心なんじゃないかと。

男 3 良心か。面白い事を云うね。

男 2 でも、人殺しは人殺しだし…。

女 2 許される人殺しだつてあると思うわ。世の中に有害な人間は皆死んじゃえばいいのよ。

男 3 おいおい、それなら我々は真つ先に死なねばならん事になるな。

女 2 違うわ。私たちはクズかもしれないけど、有害ではないもの。

女 1 それじゃあ有害な人間って、…例えば主任とか？

女2 え？
男1 ！！
男3 おいおい、過激だなあ。
女1 だって、そう言いたそうだったから。
女2 ……そうね。主任だって、あのババアと同罪よ。
男4 じゃあ植田さん。主任の事、殺せますか？
女2 えっ?!
男4 どうですか？
女2 それは…、出来ないわよ。
男4 何故？
女2 何故って…、
男3 待ってくれ。君の言い方だと、度胸がないから人を殺せないみたいじゃないか。
男4 違いますよ。ただ、実際に手を下した人間と、下さないけど死ねばいいと思っっている人間。その差はな
女1 んだらうなあと思っ
男2 どうしたのよ、市川君？
男2 顔が真っ青ですよ。
男1 俺…、
男3 まさか、君があのお婆を殺したなんて言い出すんじゃないだろうね？
女1 ちよつと、そんな訳ないでしょ。
男1 俺は…やってない…。
女1 分かっているわよ。
女2 あら、残念。
男1 俺は、老婆は、殺ってない。
女1 ほら嶋村さん、謝りなさいよ。
男2 本当に大丈夫ですか？
男4 でも、今の口ぶりだと、老婆は殺ってないけど、他の人は殺した様にも聞こえるなあ。
男1 えっ？
女1 根本君！
男4 だって…、
男1 ……
男4 冗談ですよ。
男3 いや、すまんね。君がそんなムキになるとは思わなかったから。
女1 可哀そうに。市川君がそんな事する訳ないでしょ。
女2 でも許される人殺しだあってあると思うわ。有害な人間は皆死んじやえばいいのよ。
女1 たとえば主任とか？
男3 おいおい、過激だなあ。
男2 オヤジの銀時計、戻ってきますよね？
男4 じゃあ、主任の事、殺せますか？
男3 まさか、君があのお婆を殺したなんて言い出すんじゃないだろうね？
女1 ちよつと、そんな訳ないでしょ。
女2 あら、残念。
男4 でも、今の口ぶりだと、君が殺した様にも聞こえるなあ。

女1 市川君がそんな事する訳ないでしょ。
男3 いや、すまんね。君がそんなムキになるとは思わなかったから。
男2 本当に大丈夫ですか？
男1 ……そうか、そういうことか…。
一同 ……？
男1 判ったぞ。これは誘導尋問ってことだな。
男3 誘導尋問？
女2 何言ってるの？
男1 おかしいと思ってたんだ。金貸しのババアだの、斧だの、銀時計だの…、
男2 銀時計がおかしい？
男1 いつの時代だよ！
一同 ……？
男1 大体、老婆殺しなんてニュース聞いた事ないし。架空の殺人事件でっち上げて、俺に自白させるつもり
一同 なんだろう？
…？
男1 でも、その手には乗らない。
女1 どうしちゃったの？市川君。
女2 頭がどうかしちやったんじゃないの？
男4 ねえ、自白って何のことだい？
男1 とぼけるな！その喋り方もやめろ！
男3 市川君。君、少し落ち着き給え。
男1 俺は落ち着いてますよ。あんたたちの話にビクつく俺をこっそり観察してるつもりなんだろうが、そう
女1 はいかない。
男2 何の話か、さっぱり…、
女1 ホントに大丈夫？
女2 もしかして、お母さんからの手紙のせいじゃない？
女1 ああ。
男3 手紙？
女2 よっぽどショックな事が書いてあったのよ。
男1 わかったわかった。そこまで白を切るなら、あんたたちの望みを叶えてやるよ。
一同 ……？
男1 俺が主任を殺した。
…！！
男1 これで満足だろ。
女1 …市川君…。
女2 何を言い出すかと思ったら…。
男3 おいおい、本当に大丈夫か？
男2 働きすぎなんじゃないですか？やっぱりヤバいな、この現場。
男1 信じてないんだな？
女2 それが本当なら、私、市川君抱きしめちゃう。
男3 それじゃ、祝杯でもしますか？
男4 ただ飲みたいだけじゃないですか。

女1 市川君、今日はもう帰ったら？あなた、疲れてるのよ。
男1 じゃあ聞くけど、主任は何で居ないんだ？
一同 ……
男1 とっくに来ておかしくないのに、何で今日はまだ来ないんだ？
女1 ……それは…、
男5 (主任登場して) おいおい、随分と油を売ってる人間が多いな。
主任。
男1 えっ?!
男5 なんだ、素っ頓狂な声出して。

男5の姿を見て、腰砕けになる男1

女1 やだ、大丈夫？
男5 どうした？市川。
男3 熱でもあるんですよ。
女1 (助け起こしながら) ホントに大丈夫？
男1 そんな、馬鹿な…、
男3 とんだ茶番だったな。
男4 ホントですよ。
男1 何でだ？何で…、
女2 あの、主任、昨日の話ですが…、
男5 昨日？何だっけか？
女2 少し融通してくれるって話。
男5 あ、そうだったか。すっかり忘れてた。
女2 そんな…、
男4 主任、今日の報告書、ここに置いておきますね。
男5 お、特に問題なかったか？
男4 はい、特に。では、
男5 ご苦労さん。
女2 主任！
男4 (男1に) 残念だったな。
男5 そうだ根本、今日飲みにも行くか？
男4 あ、いえ。
男5 そうか。

男4、去る

男3 いいですねえ。主任、今度は私が非番の時にでも誘ってくださいよ。
男5 あれ？君、酒辞めたんじゃないかったか？
男3 え？まあ。でも主任のお誘いなら付き合いますよ。
男5 ……
男3 さて、市川君の楽しい話も聞けたし、我々肉体労働者は夜に備えて、腹拵えでもして来るか？

男2 はい。
男5 今日は続きか？
男3 主任も人が悪い。知ってて聞くんですからねえ。
男5 そうか、よろしく。

男2、3 去る

女2 あの…、
男5 明日じゃダメか？今日はもう一件まわるトコがあって忙しいんだ。
女2 だって、昨日もそう言って…、
男5 大体、植田さん。あんた、先月の分もこっちは返して貰ってないんだがね。
女2 ですからそれは、
男5 少し虫が良すぎやしないかね？
女2 それは分かってます。だから今回で必ず。今日何とかすれば。
男5 …。
女2 …。もういいです！

女2、去り際に

女2 (男1に) 嘘つき！(去る)

男5 市川、大丈夫か？
男1 あ…？はい、すみませんでした。
男5 で、ラインが止まった原因は何だったんだ？
男1 え？
男5 おい、本当に大丈夫か？しっかりしてくれよ。
男1 はい、すみません。
男5 …。
男1 あの…俺のちょっとしたミスです。
男5 だから、そのちょっとしたミスとは何だと聞いているんだ。
男1 …ちよつと、目を離しちゃって…。
男5 何で離れたんだ？
男1 …。
男5 言えないのか？
男1 …あの…携帯を…、
男5 …。仕事中の携帯使用は禁止だって云うのは知ってるよな？
男1 …はい。
男5 もう少し仕事に責任もってくれよ。
男1 …。
男5 もういい。一個仕事片付けて来るから、その間に始末書書いていてくれ。それから、その後、少し付き合いたまえ。大丈夫だろ？
男1 …はい。

男5 立木君も付き合うだろ？
女1 えっとお…、
男5 付き合いたまえ。
女1 はあーい。
男5 では2時間後にスズランで。
男1 分かりました。
女1 行っってらっしゃい。

男5、去る

女1 何もあんなに怒らなくてもねえ。
男1 …。
女1 イライラしてるのよ、主任。
男1 え？
女1 娘さん帰って来ないから。
男1 え？何で？
女1 知らないわ。喧嘩でもしたんじゃないの？
男1 ああ。
女1 それとも、男でも作って出て行ったかな。
男1 …。
女1 市川君も前借りしようとしてたんでしょ？
男1 え？
女1 タイミング悪かったわね。
男1 …はい。
女1 急用なの？
男1 …母たちがこっち出て来るって云うんで。
女1 あら、それなら何かご馳走してあげなきゃね。
男1 …。
女1 植田さん、どうするつもりかしら？
男1 …。
女1 ま、植田さんもダメなんだけどね。
男1 …。
女1 でも、少しくらい貸してやりやいいのにね。
男1 …。
女1 凄いいこと教えてあげましようか？
男1 凄いいこと？
女1 誰にも内緒よ。だって、それこそ主任、狙われちゃうから。
男1 なんすか？
女1 実はね、主任、最近宝くじが当たったらしいの。
男1 はあ。
女1 幾らだと思う？
男1 さあ。

女1 一千万よ。

男1 ああ。

女1 あら、それくらいの驚き？

男1 え？あ、いや、びっくりしてますよ。

女1 でしょ？こないだ、人にコッソリ自慢しているのを聞いちゃったのよ、私。

男1 へえ〜。

女1 凄いわよね。だから今日だって私たちを飲みに誘ったのよ。じゃなきゃ、

男1 そうなんですか。

女1 でも、嶋村さんは誘われないの。だってほらあの人、飲むと止まらないから。

男1 ああ。

女1 そういうとこ、きっちりしてるわよね。だけど、今日割り勘だったら、みんなに言いふらしてやるんだ

から。

男1 …でも、一千万かあ。どの位なんだろう？

女1 だから一千万よ。

男1 いや、それは分かっているけど…、

女1 まあ、実際は百万の束が1センチくらいだから、それが十束？

男1 なんだ、案外少ないな。

女1 何言ってるの！一千万よ！

男1 いや、そうだけど…、

女1 …たかだかそんなもんだけど、でも私たちはその一束さえ稼ぐのに必死じゃない。

男1 そうすね。

女1 でもさ、そういうお金が、私たちにではなく主任みたいな人に廻るのよね。

男1 ええ。

女1 やっぱり神様って不公平よ。

男1 …。

女1 だからいいじゃないね、少しくらい貸したって。

男1 …。

女1 ううん、安い賃金で人をボロ布の様にこき使ってるんだもの。分けてくれたってバチは当たらないわよ。

男1 ですね。

女1 見たでしょ？お金の貸し借りになると、ずる賢い狐みたいに1円でも自分が損をしない様に警戒するの

よ。

男1 …。

女1 そりゃ私たちは、嶋村さんが言ってたみたいにクズの集まりかもしれないわ。でもね、人をハイエナみ

たいに扱わなくなると…。

男1 …。

女1 あれじゃ、奥さんに逃げられて当然よ。

男1 え？そうなんですか？

女1 そうよ、多分。

男1 …。

女1 やだ、余計なこと話してたら、もうこんな時間。私も買い物したいんで先上がるわね。それじゃ後程ス

ズランで。

男1 絶対来て下さいよ。主任と二人だったら何言われるか…。

女1 分かってるって。じゃね。

男1 お疲れ様です。

女1 ……本当だったら良かったのに。

男1 え？

女1 ううん、それじゃ。

女1、去る

男1 一体、俺は今、どこにいるんだろう？

女3、4現れる

女4は、冒頭に立っていた女（主任の娘）と同一人物である

二人の恰好は、どこかロシア文学じみている

女3 裕之！

男1 えっ？

女3 美佐子、ここに居たわ、裕之。

女4 本当だ。ひさしぶりね、兄さん。

男1 （女4を見て）なんで！！！！

女4 ？いやだ、たかだか何年か離れてたくらいで、妹の顔も忘れちゃうの？

妹?!

女3 ああ、本当に久しぶり。ほらもうちょっと、ちゃんと母さんに顔を見せておくれ。

男1 ……母さん？…？

女3 あら、少し痩せた様だね。いろいろ苦労してるのね、可哀そうに。

男1 ……本当に、母さん？…？

女3 まあ、この子ったら何てことを言い出すんだろう。でも突然だから無理はないね。

男1 何がどうなってるんだ?!

女4 母さん、私たちが上京するって兄さんに知らせてなかったの？

女3 知らせたさ。ちゃんと手紙に書いておいたよ。

男1 手紙？…ああ、これか。

女4 まさか、今読んでたの？

男1 いや、いろいろ忙しくて…。

女3 そうだよ、美佐子。裕之だって大変なんだから。

男1 でも何で此処に？

女3 着いてからすぐ、お前のうちに行ったんだよ。でも留守だったから。

男1 ……

女3 だからホテルに一度寄って。でも早くお前に会いたかったからさ。

女4 私は反対したのよ、仕事場まで押し掛けるなんて。でも母さんがどうしてもって、きかないから。

女3 だって、裕之がどんな処で働いているのかも見たかったし。

男1 ……こんなとこだよ。

女3 うん。悪くはないさ、悪くは。いいえ、このご時世だもの、仕事があるだけでも有難いって思わなくち

ゃいけないよ。

女4 兄さん、お仕事はもう終わったの？
男1 ……まあ。
女4 それなら、これから三人でどこか夕食でも食べに行きましようよ。朝から動き回っていたから私、もうお腹ペコペコだよ。
女3 私もだよ。久しぶりに裕之と会って、話したい事が山ほどあるからねえ。一晩中話したって終わらないくらいだよ。
女4 母さんの気持ちは分かるけど、兄さんの事も考えてあげて。母さんのお喋りに付き合わされたら、兄さんの体がいくつあっても足りゃしないわ。
女3 そんな事は心得ているよ。
男1 ……。
女4 どうしたの？
男1 いや…。
女4 ほうら。もう兄さん、久々の母さんのお喋りに面食らっているんだわ。
女3 だって仕方ないじゃないか、お前。裕之に会える日をずっと楽しみにしていたんだから。
女4 兄さん、悪気はないのよ。許して頂戴ね。
男1 いや、そうじゃなくて。
女4 ……？
男1 悪いけど、付き合えない。
女3 あら、どうしてなんだい？
男1 ……主任に飲みに誘われてるから。
女3 あらそうだったの。そう。…残念だけどそれなら仕方がないわね。
女4 遅くなるの？
男1 うん……多分。
女3 うん、年上の人とのお付き合いは大切にしなきゃ。そう、特に社会人ならば余計にね。突然来た私達も悪いんだから。ね、そういう事なら仕方ないじゃないか、ねえ、美佐子。
女4 ……ええ。
男1 ごめん。
女3 いいんだよ。明日帰らなきゃいけないって訳じゃないんだ、いくらでも時間はあるんだから。
女4 ……兄さん、あのね…、
女3 美佐子。いいじゃないか、今日はもう…。
男1 お前の結婚の話か？
女4 え？
男1 それなら俺は反対だ。
女4 えっ？
女3 裕之、そんな、いきなり…。
男1 だって、それが一番知りたいんだろ？
女3 そりゃそうだけど、だけどまだそんな相手の人も良く知らないうちから…。
男1 あんだけ長い手紙書いていてよく言うよ。大体さ、今時、手紙ってあり得ないし。その話し方も…。
何なんだよ、みんな。
女3 話し方？話し方がおかしいかい？…そりゃ母さん達は田舎モンだけど…。
男1 そういう事じゃなくて。
女3 お前にそんな事言われるとは思ってもみなかったよ。

女4

兄さん、それはちょっとひどいわ。

女3

いいんだよ、美佐子。裕之はこっちの生活が長いんだから。そう思っても仕方がないさ。

男1

ああ〜イライラする。とにかく俺はお前の結婚には反対だからな。

女3

裕之。

男1

大体さ、お前、ホントにそいつの事愛してんの？

女3

何て事を言うんだい、お前は。

女4

そんな、ひどいわ、兄さん。

男1

だって、金持ちのじじいだろ？誰だってそう思うだろ。

女3

裕之！

男1

でもお前がそういう女ならそれでもいいよ。お前の人生なんだからな…。でも、何だよ、アレ。

女4

なによ？

男1

俺もそいつの会社で働けば、いい役職に就けるって…。

女3

約束してくれたんだよ、お前の事を話したら。そんな事は訳ないって。頭の良さそうなお兄さんだから、

男1

事によっては会社を任せてもいいって。

女3

ふざけんな！

男1

裕之…。

男1

俺にもプライドあんだよ。

女4

兄さん…。

男1

そりゃさ、母さんが寝ずに働いて、俺大学まで出させてもらってさ、なのに今じゃこんなんだよ。何の

女4

ための大学か！って言いたくなるよ。でもさ、俺、こんな掃きだめで人生終わらすつもりは無いんだよ。

男1

いつかは俺だって！って、いつも思ってるんだよ。なのにさ、そんなもん先回りして用意されちゃうと

女3

さ、しかもそれがさ、妹の犠牲に成り立ってるなんてさ。

女4

裕之。

男1

そんな事ない。犠牲だなんてそんな事ないわ、兄さん。

女4

そりゃさそうだよ。お前はそんな風に思うやつじゃない。

男1

そうだよ、裕之。美佐子はお前の事が大好きなんだよ、だから…。

女3

知ってるよ。だから重いんだよ。

男1

え？

女4

俺に対する期待がさ、重すぎるんだよ。

男1

兄さん…。

女4

何でそんなに期待すんだよ…。

男1

…。

女3

期待されればされるほど、その期待に応えられない自分が余計惨めになるんだよ。何でわかってくれな

男1

いんだよ…。

女3

ごめんよ、裕之。お前の本当の気持ちも分からずにね。でもね、これだけはわかっておくれ。私も美佐

女3

子もこの事に関しては相当に悩んだんだ。悩んで悩み抜いて、この結論に至ったんだよ。お前は犠牲だ

男1

なんてひどい事をいうけれど、美佐子だって自分で納得してこの結婚を決意したんだよ。だからお前が

女3

云う様に、決して、…その、…お金に目が眩んだとかじゃないんだよ。それだけは分かっておくれ。

男1

…わかったよ。

女3

え？

男1

だから、もう帰ってくれないか？

女3

裕之。

男1　　お願いします。約束がありますから。

女3　　ああ、そうだったね。

女4　　兄さん。

男1　　（女4を見つめて）…美佐子、なんだよな？

女4　　え？

男1　　ごめん。言い過ぎた。

女4　　お前の好きにしろよ。…俺がお前にとやかく言える資格なんて、初めから無かったんだ。

女4　　兄さん？

女3　　さあ美佐子。いいじゃないか。今日はこれでお暇しましょう。それじゃ裕之、また明日ね。

男1　　…はい。…さようなら。

女3、4　　去る一人になる男1

男1　　一体どうなってるんだ。…そして、俺はこの後…、

男5と女1現れる。酔っぱらっている。

女1　　大丈夫ですか？主任。

男5　　これくらい平気だ。

女1　　じゃ、私はこれで。市川君、あとお願いね。

男1　　俺だって途中までしか面倒見れませんよ。

女1　　いいんじゃない。それじゃ主任、お疲れさまでした。

男5　　おう。

女1　　去る

男1　　本当に大丈夫ですか？

男5　　大丈夫だ。

男1　　ほら、あれでしたっけ？主任の家。

男5　　あ？おう、そうだ。よし、もう大丈夫だ。

男1　　それじゃ、俺はここで。

男5　　おい、うちでもう一杯やらんか？

男1　　いや、いいっす。

男5　　そうか。じゃあな。

男1　　お疲れさまでした。

男5　　（去り際に）分かっているとは思うが市川。遊びじゃないんだ、仕事は。

男1　　えっ?!

突然、時間が捻じ曲がる

女2　　ねえ市川君。ちょっとだけお金貸してくんない？

男1　　え？

女2 何よ、ケチ！
女1 いいじゃないね、少しくらい貸したって。

男1 ?!

女1 あれじゃ奥さんに逃げられて当然よ。

男2 ちえっ、僕の人生、こんなはずじゃなかったんだけどな。

男3 市川、何恰好つけてんだよ。クズはクズらしく生きようぜ。

女1 でも、人をハイエナみたいに扱わなかったって。

男4 実際に手を下した人間と、下さないけど死ねばいいと思ってる人間、その差はなんだろうなあと思って。

女2 みんな死んじやえばいいのよ。

女4 兄さんはそんなクズじゃないわ。

女3 勿論だよ。裕之は昔から頭の良い子だった。自分を活かせないのは世の中が悪いんだよ。

男2 いつまで続くんでしょうかね、この作業。

男3 我々の多くは弱い人間なんだから、それを認めればいいんだ。

女1 主任、最近、宝くじが当たったらしいの。

女3 とっても資産家なのよ。だから裕之さえその気なら、就職先だって面倒みてくれるわ。

女1 一千万よ。

女4 兄さんはそんなクズじゃないわ。

女2 なりたくてなった訳じゃないわよ。

男4 生きてること自体が有害な人間を殺しても、罪になるんですかね？

女3 結婚式に着ていくスーツが無いなら、お母さん、用意しとくから。

男3 もう少し、我々に金があったらなあ。

女1 娘さん出てっちゃったから、主任、一人きりなの。

男5 おい、もう少しし、仕事に責任もつてくれよ。

女2 本当だったら良かったのに。

女2から包丁を渡される男1

男1 えっ！！

主任の家 TVから「世界の車窓から」のテーマソングが聞こえている

男5 おや、なんだ君か？どうした？やっぱり飲み直すか？

男1 …主任。俺、きつと前にもあんたを何回か殺してるんですよ。誰が何の為に、この繰り返しをさせるのか、誰かがこの結末を変えさせたくてやってるのか、俺にはサッパリ判らないんですけど、でも、やっぱり俺、あんたを殺しちゃうんです。他は少しずつ変わっても、ここだけは変わらないんですよ。だって、アンタがいけないんですよ。俺、前からアンタに殺意抱いていた訳じゃないけど、何かがかさなっちゃったんですよ。今日起こった出来事の一つ一つが…。だからそれは、俺のせいじゃなくて、きつとアンタがいけないんです。

オープニングと同じ景色の少し前

男5と男1、格好悪くもつれ合いながらも、男5は殺される
そこに女4

女4 (入ってきながら) お父さん、鍵、開けっ放しだったわよ。あれ？
男1 !!
女4 ∴。

暫し見詰め合う二人

男は女に近づき、腹を刺す

二人、ストップモーションのまま、明かり変わる

男3 あれ？何してるの？

男1 えっ！

男2 なんか怪しいなあ。

男1 ああっ?!何だ！ここは！

女3 え？何？どうしたの？

男1 母さんっ?!

女3 母さん？

男1 えっ？

いつの間にか場が変わった

男5は居なくなっている

男3 何してたんだよ？

女4 別に何でもないよ∴。

男1 え？

男2 ふーん。

女4 はい。(男1の包丁を奪い、消しゴムを渡す)

男1 ∴何なんだ∴？

男4 市川君、おはよう。

と、次々と人々が「おはよう」と云いながら入って来る

どうやら小学校の様である

当然、登場人物たちは小学生な訳だが、特に子供を演じる必要はない

男2 あ、やべ。

男3 どした？

男2 宿題やるの忘れた！

女1 わー、先生に怒られる。

女3 私、見せてあげないからね。

男3 大丈夫だよ、俺もやってないから。

女2 ぷっ∴。

男2 あ、今笑ったな。

女2 別に笑ってないよ。

男2 ああ、どうしよう。
男3 そんなに悩む事か？

男2 いつもやってこない嶋村君には分からないかもしれないけど、小学生にとって宿題を忘れるって事は、
男3 プレゼンする日に、その書類を忘れてきたのと同じくらい重大なことなんだよ。
男3 何言ってるの？

男2 ああ、こんな時、ドラえもんが居てくれたらなあ。

男3 お前、大人なのか子供なのかよくわかんね。

男2 時間が昨日に戻ってくれればいいんだよ。そしたらさ、

女1 ムリムリ。

女2 そーそー。

女1 現実はそのなにごくない。

女3 市川君？どうかした？

男1 え？いや別に…。

男5 入って来る どうやら担任の様である

男2 起立、礼、

一同 先生おはようございます。皆さんおはようございます。

男1 あ…、

男2 着席。

男5 よし、皆いるな。今日はちょっと皆に話したい事があります。

一同 …。

男5 実は、昨日スズラン堂文具店で、万引きがあったそうです。

一同 ざわざわ。

男5 はい、皆静かに。

一同 …。

男5 お店の人の話では、悲しい事にこの学校の生徒だったそうだ。そして、紫色のバッチをつけていたらしい

一同 ざわざわ。

男5 はいはい静かに。つまりはこの学年って事です。それで、今、他のクラスでもこの話し合いしてる
ところなんだが、

一同 …。

男5 先生としては、正直に名乗り出て欲しいと思う。勿論、今云えとは言いません。いつでもいいから、でき
れば正直に言ってきて欲しいと思ってます。

一同 …。

男5 でだ、この時間を使って、ちょっと皆で考えたいと思います。

女3 先生。何が盗られたんですか？

男5 消しゴムのようです。

一同 ざわざわ。

男1 えっ！

男5 はいはい静かに。いいですか？盗られた品物の価値が問題ではありません。

男3 お前だろ？

女2 違うわよ！
女1 うふふ。

男5 そこ、うるさいぞ。万引きをしてしまう理由には二つあると先生は思います。まず一つは本当にそれが欲しいがお金が無くて万引きしてしまった場合。もう一つは単なる興味本位で万引きしてしまった場合。昨日はどうやら二人で来ていたようです。
一同 ざわざわ。

男5 で、先生が思うには、たまたま二人で話が盛り上がって、スリルを味わいたくて万引きしてしまったのではないかと思うんです。しかしいいですか。ここが大切なんだが、たとえ興味本位で、半分は冗談のつもりだったにしろ、万引きは、れっきとした犯罪なんです。

先生が話している間に、男4の視線を感じて男1がそちらを見ると
男4がこっそり消しゴムを見せた 驚く男1

男1 そんな…。

男5 どうした？市川。

男1 え？いえ、別に…。何でなんだよ…。

ニヤニヤしている男4

男5 いいですか。たとえ消しゴム一つでも、犯罪は犯罪なんです。

女4 (手を挙げて) 先生。

男5 何だ、井上？

男1 井上？

女4 私、犯人知ってます。

一同 ざわざわ。

男1、4 !!!

女4 昨日、私、見ちゃったんです。

一同 ざわざわ。

男5 ほら、皆、静かに。

女4 今、発表した方がいいですか？

男5 …いや、それはやめよう。

一同 えーーーーー！

男3 発表しちゃえばいいじゃん。

男2 そうだそうだ。

女1 ねえねえ、うちのクラス？うちのクラス？

男3 先生。そいつらは悪い事をしたんだから、発表すべきだと思います。

男2 そうだそうだ。

男5 先生は何も、犯人探しをしたい訳じゃないんだ。

男3 でも、犯罪者なんですよね？

男2 犯罪者はみんなに分かった方がいいと思います。

女3 先生。

男5 何だ、石田。

女3 でもそれは、いじめに繋がるので良くないと思います。
女1 だって、悪いことしたんだもん。自業自得よ。

男3 そうだ。悪い奴は懲らしめるべきだ。

男2 賛成。僕ら小学生の発想では善と悪しかありません。

女3 でも、出来心かもしれないじゃない。

男3 うわ、出来心ってババくせー。

女1 そんなんで人が殺されたら、たまんないわよね。

男2 出来心を許していたら、警察は要らないと思いまーす。

男5 でも、先生も発表するのには反対だが、他に意見あるか？市川は？

男1 えっ！

男5 学級委員長としての意見はないか？

男1 学級委員長…？

男3 よっ！学級委員長！

男1 …僕も、悪い事は悪い事だと思えますが、それと犯人捜しは違うと思います。だって、クラスメイトを

疑うなんて嫌じゃないですか。

(拍手)

男5 なかなかいい意見だな。さすがは市川だ。じゃあ…、植田は？

女2 …！！私じゃありません！

女1 ぷっ。

男5 そんな事誰も言っていないじゃないか。

女2 だってどうせ皆、私の事疑ってるんだから。

男3 やっぱお前か。

女2 違うもん！

男5 おいコラ、嶋村。

男1 (どさくさに紛れて女4に) あのださ…、

女4 …。

男2 うわっ！何だ、こいつ?!

男5 どうした？長谷川。

男2 先生！根本君がおしっこ漏らしてます！

一同 えーっ！

男3 きたねえ、根本。

男2 えんがちよだ。

男4 (泣いている) ヒックヒック。

男5 静かにしろ。何だ根本、言ってくれば良かったじゃないか。すぐトイレに行って体操着に履き替えて

女2、3 こい。植田と石田。雑巾でちよつと床を拭いてくれるか？

女2、3 はい。

男5 立木は保健室行って、ビニール袋貰って来い。

女1 はい。

それぞれの行動

女4 かわいいそ、根本君。

男1 あのさ、
男5 おい、井上。ちょっと。
女4 はい。

男5に呼ばれ、何か小声で話す二人
ビクビクする男1

男3 しっかし、だせーよな。

男1 え？

男2 この年でお漏らし君だもんね。

男3 違うよ、万引き。

男1 え？

男3 どうせ盗むんなら、もっと高いモンやりやいいのにな。

男1 うん…。

男3 間際でビビったんだぜ、きつと。

男2 へっへっ。

男3 あのスズラン堂のオヤジ、感じ悪いし。

男2 そうそう。僕らがみんな、万引きするもんだって目で見てるし。

男3 ざまあみろだ。

男5 何言ってるんだ嶋村、聞こえてるぞ。

男3 ごめんなさい。

話し終わった女4に近づく男1

女4 言っていないから。

男1 え？

女4 まだ言っていないから。

男1 …。

男4など戻り、一同落ち着く

男5 根本、大丈夫か？

男4 …はい。

男5 皆、落ち着いたな。…とにかくだ、この問題は…、

女4 先生。

男5 何だ？井上。

女4 さつき、市川君がクラスメートを疑うのは嫌だと云ってましたが、ちょっと違う気がするんです。
男5 どういうことだ？

女4 だって、犯人捜しならそうかもしれないけど、犯人は分かっているんですよ。だったら、その犯人を私
たちがどう裁くかが議論されるべきなんじゃないでしょうか。

男3 大人だ…。

男5 うん。まあそうだが…。

男4 うわあ〜!!!

男5 今度はなんだ！
男4 僕がやりました！

一同 ええっ！

男1 根本君。

男4 僕が、僕が、市川君と一緒にやりました！

男1 根本君！

男5 ……本当なのか？

男4 僕は嫌だったんです。でも市川君が、一緒にやったら〇〇のプレミアムカードくれるって。これで僕たちは同志だ。消しゴム同盟だって。

男1 ……

男5 市川…、

女3 嘘です！きつと、根本君の妄想です！市川君に限って…。

女1 おろ？

女2 岡惚れね。

男5 お前たち、いくつだ？…市川、

女3 ねえ市川君、嘘よね？お願い、嘘って言って！

男5 俺に喋らせろ！

女3 ごめんなさい。

男5 市川、本当なのか？

男1 ……

男5 市川。

男1 アハハ…。先生、本当ですよ。

一同 ！！

男5 市川。

男1 前に俺、あそこのオヤジに疑われたことあるんすよ。で、他のお客さんいる前でランドセルひっくり返されて…。でも、盗ってないこと判ったって謝りもしないんすよ、あのオヤジ。疑われるような事したお前の方が悪いんだみたいな…。プライド傷つきましたよ。だって俺、学級委員長ですよ。でね、復讐してやろうと思ったわけですよ。

一同 ……

男1 でも人選誤ったなあ。ダメだよ、根本君。弱すぎるよ。根性なさ過ぎだよ。だから皆にいじめられるんだよ。今度は嶋村君にお願いしようかなあ。

男3 僕は遠慮しとくよ。

男1 それで、どうします？井上さん、俺を裁くんだっけ？

女4 ……

男5 市川。

男1 まあ罪を犯した訳だから罰を受けるのは当然だよ。でもさ、俺、罪だとは思ってないから。あんなオヤジ、死んでもいいと思ってるから。でもさ、皆もそう思っているよね？

男5 市川…。

男1 先生。罪って云えばさ、井上さん、自殺サイトに結構過激な投稿してるよね？俺、判っちゃったんだ、井上さんって。

女4 ……

男5 そうなのか？

男1 あれって、自殺志願者みたいなフリして、他の人を自殺に追い込んでるよね？ 凄いよ井上さん。自分は手を下さずに人、殺してるんだもん。

男5 井上…。

男1 あゝ、こうなったら全部言いたくなってきちゃったな。先生、前に俺の給食費なくなった事あったでしょ？ あん時は、俺が忘れてきたのかもって言ったけど、俺、ホントは知ってるんだよね。植田さんだよ？

女2 ね？

女2 えっ?!

男1 後でそつと返してくれるかなって思ってたんだけどさ。

女2 うわっ（泣く）

男5 植田…。

男1 あと石田さん。俺のこと好きなのは分かるけど、勝手に俺の体操着持っていくのはやめて貰えるかな。

女3 市川君…。

男1 これだって犯罪だよ、先生？

女3 うわっ（泣く）

男5 石田…。

男1 あ、そうだ。学校で飼ってたウサギ殺したの、あれ、長谷川君だよ？

男2 え…？

男3 そうだったのか?!

男1 嶋村君が可愛がってたの知っててやるんだもん。

男3 お前…、

男2 うわっ（泣く）

男3 何でだ！ 何でびよん太を！

男1 駄目だよ、嶋村君だって責められないよ。

男3 え…？

男1 変な薬混ぜて、野良犬や猫に食べさせてるでしょ？

男3 うわっ（泣く）

男5 長谷川、嶋村…。

男1 立木さんは、危ないサイトに危ない写真送ってるよね？

男5 立木…。

女1 うわっ（泣く）

女4 もうその辺にしといたら？

男1 何言ってるの？ 仕掛けてきたのはそっちでしょ？

女4 ばっかみたい。

男1 そうだよ、ばっかみたいだよ。俺、大人だからさ、今まで見て見ぬフリしてきたの。でもさ、所詮は子どもだね。

男5 俺のクラスはどうなってるんだ〜！

男1 何言ってるの？ そりゃ、アンタのせいでしょうが。

男5 え？

男1 根本君がいじめられてんの、アンタにも責任あるっしょ。根本の母ちゃんと寝てんだからさ。

男5 うわっ（泣く）

女4 ホント、ばつかみたい。コドモ。
男5 え？だって子供でしょ？今。

…。

男1 ねえ。お前、本当は誰？俺に何させたいの？

(びっくりした顔で男を見る)

女4 ？？？な、なんだよ？

男1 何言ってるの？

女4 え？

男1 だってこれ、アンタの妄想でしょ？

女4 えっ?!

男1 私だっていい加減、殺されるの飽きてるんだから。今度は何させるつもり？

…。

女4 かくれんぼと一緒だね。

男1 え？

女4 見つかりたくないのに、見つからなければ不安になる。

男1 …嘘だ。だって、何だよ、これ…、

女4 知らないわよ。どうするのよ、こんなにしちゃって。

…。

女4 魔法でも使えば？

男1 魔法？え？魔法??

女4 そんなボキヤブラリーしかないのよ、今、小学生だから。

男1 …魔法…

女4 子供なんでもん、魔法でちよちよいよ。

男1 でも、魔法って…、

女4 思えばいいのよ、もうやめたいって。

男1 思う???

チャイムが鳴る

男5 お、もう時間だな。

男1 え？

男5 じゃ、今日は終わりにしよう。

男2 起立、礼。

一同 先生さようなら。市川君、さようなら。

男1 え？

皆、それぞれ帰っていく

女4 ほら、うまくいった。じゃあ、さようなら市川君。

男1 ちよっと待って！これからどうすれば…、

女4とすれ違いに女3入って来る

男1 あんたは、…石田さんじゃないんだよね？

女3 裕之…。

男1 また、母さんって事なんだよね？

女3 ？

男1 ったく…、一体どうなってるんだ！

女3 そんなにイライラしないで。

男1 別にイライラなんてしてないよ！

女3 …一応は、元気そうね。

男1 …。

女3 …あのね、裕之…。

男1 そういや美佐子は？はは、キャラ変えんのに手間取ってるのか？

女3 …！！（泣く）

男1 何なんだよ。俺の妄想なら、何で思い通りにならないんだよ。

女3 裕之…。落ち着いて聞いてね…。美佐子…、死んじゃったの。

男1 …?!え？

女3 …電車に飛び込んで…、

男1 そんな…、

女3 魔が差したのね、きつと…。あの子、そんな素振り見せなかったのよ。でも、きつと、限界だったのね

男1 ……。

女3 そんなあの子の気持ちに気付いてあげられなかった…。

男1 え？ちよっと待ってよ。え？だつてさっきまで此処に居たじゃん。美佐子？え？井上さん？どっちでも

女3 いいや。呼べば出て来るんじゃないの？ほら、魔法で、

男1 しっかりしてよ裕之！あんたまでそんなんじゃ、母さん、どうしたらいいの。

女3 …。

男1 あの子、もつと強い子だと思っていたのに…。

女3 もしかして…、これ…、現実？

男1 …私だつて、死にたいよ…。どうすればいいんだよ…。

女3 母さん…、

男1 ？

女3 …俺…、ナニ、した…？

男1 裕之…（泣く）

女3 じゃあ、俺のせいで、美佐子…、

男1 …（泣く）

女3 そんな…、

男1 あの子…、アンタのこと、大好きだったから…。

女3 …こんな事、考えてもみなかった…。

男1 母さんだつて、あんたたちがこんな事するなんて…。

女3 ……。

男1 …（出てきて）そろそろ時間だ。

男2 …（出てきて）そろそろ時間だ。

男1 え？
女3 …また来るわね…。
男1 …。
女3 なんかに欲しいものある？
男1 …。
女3 じゃ。
男1 母さん、
女3 ？
男1 …ごめん。
女3 裕之…。
男1 美佐子…、ごめん。本当にごめん！

静寂 男1一人

男1 俺はこの時初めて、罪の重さを感じた様な気がします。そうです。殺した時だって、その後だって、ただ、自分でやったのがばれる事だけが恐ろしくて、いや、むしろ、アイツさえ目の前に現れなきゃ、俺もこんな事にはならず済んだのについて、相手を恨んでさえた様な気がします。でも、いまさら何を言っても遅いんですよね。
子供の頃、夏休みの宿題が終わらず、いつその事、学校が火事になってくれればと何度も願ったことを思い出します…。でもそんな都合の良い出来事が起こるはずも無く、いつも先生に大目玉を喰らってしまった。
それは本当にある日の出来事に過ぎなかつたんです。でも、その出来事が有ったと無かつたのでは、悔やんでも悔やみきれないほどの、大きな違いがあるんです。

明かりが変わると、どうやらここは工場の事務所の様であるが、具体的な要素は何もない
女が二人、入って来る

女1 どしたの？大丈夫？
男1 え？
女1 何だかぼうつとしてるけど。
男1 あ…、
女1 嫌な知らせでもあった？
男1 え？
女1 それ。手紙。
男1 え？ああ…、
女1 ま、どうでもいいけど。
男1 また戻った…。でも…、
女1 (女2に) はい、じゃこれね。お疲れ様。
男1 母から…、
女1 え？
男1 母からの手紙です。
女1 ああ、お母様。

女2 ねえ…。今日中に必要なのよ。
女1 だから私に言われたって。
女2 お願ひよ、りえちゃん。
女1 主任に聞いて。
女2 だってえ。
女1 (男1を見て) やだ、どしたの？泣いてる？
女2 うわ、ホントだ。
男1 アハハ…。
女2 何かあった？
男1 いや別に。
女1 やだ、何よ。
男1 …あ、今度、妹が結婚するって。
女1 あらいいじゃない。え？それで泣いてたの？
男1 違いますよ。ただ、フツーに生活送れるっていいなと思って…。
女1、2 (顔を見合わせて) ???

男が二人「寒い寒い」と云いながら入って来る

男2 第3セクション、休憩入ります。
女1 ご苦勞様。お茶入れる？
女2 はいはい、私が入れますよ。(と出ていく)
男2 いつまで続くんすか？この作業。
男3 終わるまでかな。
男2 そりゃそうだ。
男3 お？辞める気か？辞める気か？
女1 辞めてもいいわよ。
男2 いや、それは…、
男3 最近の若者は根性無しだからなあ。
男2 それ、モラハラっす。
男3 事実だろ？自分の欠点をそんな都合のいい言葉に置き換えるな！(パシッ)
男2 あゝ、パワハラ〜！
男3 どうよ市川君。
男1 はあ…。
男3 あれ？なんか感動してる？俺の言葉に？
女1 さつきから変なのよ。
女2 (お茶を持ってきて) 変じゃないよね。人生に感動してるんだもんね。
男2 くそ、俺の人生、こんなはずじゃなかったんすけどね。
男3 ははは、こんなはず、こんなはず。
女1 人生が自分の思い通りになりゃ、誰も苦勞しないわよ。
男3 確かにこの環境は劣悪だ、劣悪極まりない。だがな、
女1 はいはい、もうわかったから。
男3 あれ？俺の演説聞かないの？

男2 遠慮しときまーす。
男3 良い話するのに…、ねえ、市川君。
男1 鳴村さん…、
男3 ?
男1 それがいつもの鳴村さんですよ。
男3 ??
男4 (入って来て)第2セクションあがります。
女1 お疲れ様。
男4 あれ?主任は?
女1 それがまだなのよ。
男4 珍しいですね。

男5来る

女2 あ、主任。
男5 またお前ら、油売ってんな。
女2 あの、主任、昨日の、
男1 主任。
男5 ?
男1 すいませんでした。
男5 あ?ライン止めた話か。
男1 え?ああ、そうじゃなくて。
男5 ?
男1 俺、もう繰り返しませんから。絶対に繰り返しませんから。神様がきつと俺に最後のチャンスをくれたんです。だから俺、絶対に繰り返しません。

暗転

暗転の中、声

男1 本当に大丈夫ですか?
男5 大丈夫だ。
男1 ほら、あれでしたっけ?主任の家。
男5 おう、そうだ。
男1 じゃ、俺はここで。
男5 おい、うちでもう一杯やらんか?
男1 …はい、行きます。

主任の家

男5 いやあ、久々に飲んだな。
男1 はい。
男5 ふう〜(と、横になる)

男1 ええつ、主任、寝ちゃうんですか？
男5 ……
男1 ちよつとお、主任。
男5 ……皆にはうるさく聞こえるかもしれないが、
男1 え？
男5 俺だって責任があるんだよ。
男1 ……
男5 ちよつとしたミスが命取りになる事だってあるんだ。
男1 ……はい。
男5 ……昔、俺の不注意で人が一人死んだ…。
男1 え！
男5 ……二度とあんな事、繰り返したくない…。
男1 ……
男5 それなのになあ…。
男1 ？
男5 植田さんだって、もうちよつと頑張ればどうにでもなるのに…。
男1 ……ですね。
男5 嶋さんだって、体ボロボロだろ。
男1 ……
男5 何でもつと、皆自分を大切にしないかなあ。
男1 ……
男5 あ、そうだ。
男1 え？

男5、何やらお菓子の箱と写真楯を持つてくる

男1 (写真を見て) 奥さんですか？
男5 この中に何が入ってると思う？
男1 えっ？お菓子じゃないんですか？
男5 じゃ〜ん。
男1 ……!!主任、それ?!
男5 一千万。
男1 主任!
男5 当たったんだよ、宝くじ。凄いだろ。
男1 ……
男5 初めてだよ、こんな事。どうしたらいいのかわからなくて、とりあえずこんな箱にしまっちゃった。
男1 ……主任、やめて下さい。俺を試しているんですか？
男5 ははは、(ふたを閉めて) これで母さんを、近くのもつと良い病院に入れてやる事が出来るな。
男1 え？奥さん、入院してたんですか？
男5 もう一年になるか、母さん入院して。
男1 ……そうだったんですか…。
男5 (写真に) そういや母さん、おとといくらいに行っただろ？幸子。

男1 えっ？娘さん？

男5 どうしても母さんに報告するんだって、すっ飛んでったんだよ、あいつ。どうせ行っちゃって、母さん、解からんだらうにな。

男1 ?!

男5 あれ？でも今日帰ってくるはずだがな？電車、遅れたかな？

男1 …主任…。すいませんでした。俺、いろいろと、誤解してました。

男5 (力なく笑う)

男1 俺、この仕事辞めます。で、もう一度…、

男5 母さんと会話出来なくなって、俺も独り言が多くなったよ。

男1 …？独り言?!

男5 俺も歳かな…。

男1 ……今、知りました。本当に、後悔は先には立ってくれないのだと。そして人間は、こんな馬鹿げた繰り返しを何度もしてしまっ、どうしようもない生き物なんだと。

主任、今の俺なら言えます。今、俺の目の前から逃げて下さい。そして、娘さんを帰って来させないで下さい。お願いします。

リモコンでTVをつける男5

TVから「世界の車窓から」のテーマソングが流れる

そこへ、チャイムの音

男5 おや、誰だ？ …あいつ、鍵持って出無かったのか？

玄関に向かう男5

男1 主任、出ちゃダメだ、ダメだ。だって、それは…、

男5 (声) おや、何だ、君か。

静寂

男1 俺、もう大人だから、魔法は使えないや。

……ドラえもんがいてくれたらなあ…。

音楽

音楽と共に、全ての壁が剥がれ落ちていく

今まで築き上げたモノが、脆くも崩れ去るように

壁が剥がれた後は、牢獄の様にも見える

音楽が一瞬止み、再び静寂

と、その向こうに男5と女4

男5 おいおい君！

男1 えっ？

男5 そんなに簡単に懺悔して貰っちゃ困るよ。人を二人も殺しておいて。

男1 ……先生、さようなら。皆さん、さようなら。

鉄扉が閉まるような物凄い音
それは、死刑執行の時にも似て
再び音楽
暗転

終わり

「罪と罰」新潮文庫 工藤精一郎訳を参照

音楽「世界の車窓から」のテーマ曲引用(誰もがコレを聞く事で時間がわかる為)